

しがだい

== 滋賀大学広報誌 ==
第14号 平成15年2月

多文化交流から見えてくるもの
世界に向けた環境教育
日本の経済・経営を英語で講義
連載
今の研究を語る
滋賀大学の新しい動き

国際化への挑戦

何が問われているか

国際化ってなんだろう？

国際化ということばが、世をあげてざらびやかに乱舞している今、あらためて考えてみたくもなってくる。

もつとも、現象面だけをとらえて言えば、事は至極単純である。経済や政治、ファッションや芸術など、いろんな分野で、人、もの、金、そして生活習慣や思考スタイルなど広い意味での文化が、国境を越えて交わりあっている。そうしなければ、多くの活動が成り立たなくなっている。簡単に言って、世界がそれだけ狭くなった、というわけである。

だが、人、もの、金、文化などどのようなやりかたで交わらせるのかそのこと自体が、じつはやっかいな代物なのである。そこには、多かれ少なかれ、誤解や偏見やいきちがいが付きまとう。それを一つ一つ乗り越えて進む覚悟がなければ、国際化に挑むことはできない。いうまでもなく、それにかかるエネルギーも相当

なものである。だが、決して楽ではないこのような作業を引き受けるのは、国際化の波がいわば必然であるということもあるが、異質なものと交流がもたらす果実が大きいからでもある。未知の文化に触れ、また見知らぬ相手のなかに自己を拡張する。その喜びと興奮には、何物にも代え難いものがある。そうした果実を手にするためには、どのような知識や技術が必要であろうか。それは、多くの試行錯誤を経て獲得されるものだろう。国際化の意味は、おそらく、そうした試行錯誤の過程そのもののなかに潜んでいるのかもしれない。

国際化への挑戦ということ、忘れてはならないことがある。

それは、広く国際舞台に働きかけていくに足る、鮮明な自己主張の存在である。

山田洋次監督の「男はつらいよ寅次郎夕焼け小焼け」が、なぜアメリカで受けるのか。それは、国際的と

いうよりはあまりにも日本的な、いわば日本人の心情を謳った映画であるにもかかわらず、それは、万国共通の普遍的な庶民感情、つまりハートをふんだんに含んでいる点で、すぐれてインターナショナルな性格を帯びているからである。映画をつくる『国民文庫』。要するに、何を世界に訴え、何を世界に広げようとしているのか。そのことなくしては、もはや国際化を語る資格はないであろう。

さて、大学の国際化への挑戦は、いかなる戦略をもって進められるべきか。本特集を通して、そうしたことを考えるきっかけが生まれるとすれば、誠に幸いである。

(広報委員会委員長)



【表紙解説】 シリーズ「近江の祭り」 近江八幡の左義長祭

左義長とは、もともと旧暦1月15日前後の小正月に行なう民俗行事の一つ。正月飾や前年のお札などを竹を組んだやぐらとともに焼く。おたいまつをつくって燃やすところもある。サギチヨウ以外に、ドンド焼き、ホッケンギョウ、サイトヤキなどともいう。近江八幡の左義長は、現在では3月中旬の土日に市中の日牟礼神社の祭礼として行なわれる。各町で趣向を凝らして山車の上にその年の干支にちなんだ飾り物を作り、頭の上に火のぼりという御幣をつける。土曜の午後の一斉に町に繰り出した左義長には、女装して化粧した若者が乗って踊りくる。夜には、この左義長を神社で燃やし、クライマックスを迎える。

(滋賀県商工観光政策課所蔵のフォトコンテストの入選作)

多文化交流から見えてくるもの

国際化が叫ばれる中で、本学の教職員の海外出張・研修や、外国人研究者の受け入れが積極的に行われています。本学は、海外の7つの大学等と大学間交流協定を結び（9頁参照）研究・教育の国際交流、留学生の派遣、学生の短期研修などが盛んに行われています。また、現在、本学では150名を越える留学生が学んでいます。

今回の特集では、まず、本学の6名の教官から、多（他）文化交流の視点、国際交流を通して見たことや感じたことなどについて語っていただき、つづいて、滋賀大ならではのユニークな国際貢献について紹介いたします。

グローバル化社会を見る目

小田野 純丸（経済学部教授）

日本の社会がグローバル化という海図のない大海にあるという見方について異論は少ないと思われま。私達がこの新しい航海に本格的に船出してから二十年ほどの期間が経ちます。グローバル化という枠組を意識するとしなやかに関わらず、この新しい波が私達の生活にさまざまな関わりを持ってきていくという意識は明らかに浸透してきております。

なぜ国際理解という視点が今日のグローバル化社会の中で求められるのかについて、その教訓を私達の辿ってきた経験の中から探り当てることが可能です。国境という単純な線引きの内側で自分の社会を見続ける意義は急速に後退しております。グローバル化された世界では、日本を通して世界を見つめるのと同じくらい、外から日本を見つめることが重要なテーマとなっております。それは、世界との共通性を感じると同時に、両者の差異について真摯に見極めることが極めて重要なこととなっております。

日本がまだ貧しさを感じていた頃、日本人は経済大国を目指して猛烈に働き先進諸国に追い付き追い越せとしゃにむに努力を続けて参りました。例えば、そのころの外国のイメージは、テレビで放映されるアメリカの番組から生み出されたものが多かったのが思い出されるでしょう。電化製品に囲まれ車社会を満喫している豊かな社会、そこそこは私達にとっては羨望的でもありました。努力の甲斐あって、私たちは一つ一つそれらの物質的な要求を手収めることができました。しか

も、八十年代には『ジャパン・アズ・ナンバーワン』と賞賛されるレベルにまで経済発展を遂げることができたのです。

しかし、これらの成功はどちらかというと『囲い込まれた成功』という要素が多いものでした。八十年代以降のある時期にビジネスに関しては日本モデルこそが世界の目指すスタイルではないかという自負心も芽生えました。しかし、それはやがて独りよがりの達成感でしかないこととうすうす気が付くことになりました。九十年代になるとそのモデルも瓦解し始めたことから、日本について世界の注目も一気に冷え込んでしまいました。

日本の国際化プロセスの典型例である価格破壊という現象を取り上げて考えてみましょう。世界的に日本の物価高が語られていた一方で、私達は日本のあらゆる価格（モノでも資産でも）についてそれが当たり前のものと思い続けてきました。

『囲い込まれた成功』を収めた国では多少の不都合があつたにしても、それは自然に受け入れられる代価であると思ひこんでいたのかもしれない。しかし、グローバル化が進む中では、世界から隔離された価格体系が長期にわたって維持される根拠は、閉鎖社会を指向しない限り無理



があります。実際、私たちが日本のモノの価格が世界に比して高いと認識できるようになるにはそれほど多くの時間を必要ともしませんでした。同時に、日本の外から私たちの生活環境や社会的組成を見つめ直す必要性が急速に意識され始めました。日本は果たして世界一豊かな国なのだろうか？ 私たちにとって自然な問いかけです。多くの日本人が海外に駐在するとか旅行に自由に出かけることが可能になると、自身の目で私達の生活を批判的に見る機会を作り出せるようになりました。これこそが国際化を通じて私達が育むことができた知的好奇心の一つであります。同時に、外から注がれる日本の文化についての関心は私達が誇れる財産であるという意識も大切であることを知りました。

外を知ることが内について熟考することに通じます。その意味で、外の社会についての視点を持つことは私達の生活を豊かにする上で重要な関わりを持つこととなります。内から外を見つめ外から内を見直すに当たっては新鮮な目を養うことが大切です。その意味では、若い段階からそうした接点を求めて多くの疑問を持つことが勧められます。国際交流の意義は、実は一人一人の知的好奇心を高めて自身や自分の社会について見つめ直す豊かな目を育んでくれる機会なのです。これこそが多(他)文化を知ることの本質ではないかと思われまます。

地域から世界への展開

板倉 安正 (教育学部教授)

それほど英語が得意でない私が海外との交流に関わりが持てるようになったのは、故鈴木紀雄先生のご指導によりです。先生は、皆様ご周知の通り、環境問題とりわけ湖沼の水環境問題の大家としてその解決に奮闘された方です。先生をリーダーに、教育学部の川嶋宗継先生と遠藤修一先生がチームを組んで、ミシガン州立大学とヒューロン湖サギノ湾における水草帯の生態学についての共同研究が進められていました。私は、リモートセンシングによる観測も加えようということで仲間に入れていただくことになり、以来、ミシガン州立大学の F. D. Di. 先生、C. Macnab 先生、T. Baterson 先生と知己を得ることができるようになりました。ただ、セスナ機に赤外線カメラを搭載して観測を試みましたが、飛行機の揺れが大きくて解析できるデータは得られなかったため、お恥ずかしい結果に終わったことを今も申し訳なく思っています。Di. 先生は大の日本びいきで、本学とミシガン州立大学との友好関係はひとえに先生に依るところを多とします。先生は化学がご専門ですが、広く環境問題全般にご造詣が深く、今もいろいろとご指導を頂いています。ある時の雑談の中で、滋賀大学とその友好関係にある大学で環境に関するシンポジウムをやりましょうという話になり、一九九七年の滋賀大学国際シンポジウムが開催されることになりました。

瓢箪から駒ではありませんが、ちょっとしたきっかけからこれは始まりました。Di. 先生を中心に川嶋先生、遠藤先生、経済学部からは北村裕



1997年に開催された「滋賀大学国際シンポジウム」

明先生、J. S. Eads 先生らが協力してシンポジウムの企画が進められました。滋賀大学国際シンポジウム「環境問題の解決を目指した環境教育と情報支援システム」は、当時の加藤幹太学長のご指導の元に全学的な催しとして成功裏に終えることができ、その記録は出版物としてCRC出版社から「Integrated Environmental Management : Development, Information, and Education in the Asian-Pacific Region」として刊行されました。

このシンポジウムは友好大学のご協力により継続され、第二回は二〇〇〇年にオーストラリアのディーキン大学で開催されました。私がディーキン大学と関わるようになったのは教育学部の平井肇先生のご尽力によりです。きっかけは、一九九四年に首都キャンベラで開催された砂防に関する



国際会議に出席した折、オーストラリアへ行かれるのなら、Brumby先生に会ってきて下さいと勧められてからです。Brumby先生はDini先生と同様に気さくな先生で実に丁寧に滋賀大学とデューキン大学との橋渡しをして下さいました。

Brumby先生の紹介で、デューキン大学のR. Wallis先生、B. Mitchell先生をご紹介いただき、本学から教育学部の佐藤尚武先生、平井先生、川嶋先生、遠藤先生に経済学部の近藤学先生、森晶寿先生、只友景士先生が加わって、メルボルンから少し離れたワーナンブルキャンパスで第二回国際シンポジウム「水環境問題への取り組み…研究、政策、産業、市民社会の関わり」を開催することができました。デューキン大学との友好関係は森主一学長時代から始まり、尾上久雄学長、加藤幹太学長、現在の宮本憲一学長のご指導で継続しています。さらに、第三回は、二〇〇三年にタイのチェンマイ大学での開催が予定されています。Dini先生との出会いから始まった国際シンポジウムが着実に三年毎に開催されていくのは喜ばしい限りです。そもそもこの国際シンポジウムは、本学のびわ湖とその集水域に関する研究から始まっていると言えます。鈴木先生もその一人でありましたが、多くの本学の先輩諸先生方の地域に基盤を置いた研究が国際的な関心を呼び発展していったものです。一地方大学が地域に根ざした研究を深めれば深めるほど、内容は国際的な問題として発展していくようです。地域から世界への展開がそこにはあります。

研究をするということについていつも心に留めている言葉があります。トランジスタの発明者の一人W. Shockley博士の「science aspects of practical problems」です。これを勝手に「現場に

科学の目を」と解釈していますが、改めてその意を噛みしめ、身近な地域の問題の地道な取り組みが国際的な広がりを持つようになるという研究の面白さを、その継続への期待を込めて、眺めています。

大学生のスタンス

楊 暁文（教育学部助教授）

近年、「環太平洋圏の華文学に関する基礎的研究」をしています。これは他大学の教官と科学研究費補助金（基盤研究（A×1））を得て平成十二年度からスタートした研究で、現在進行中です。華文学とは、中国、台湾のような中国語環境ではない国や地域で創作された中国語による文学を



canteen 風景

指します。二十世紀末から世界の新興勢力として台頭しつつある中国の影響力を背景に、この十数年來、華文学に関する研究が盛んになり、中国本土はもとより、台湾やアメリカにおいては研究センターの設立や研究成果発表の促進などが積極的に行われています。客観的に見てみれば、日本における華文学研究が未開拓の学術分野であるのは実情のようです。このブランクを埋めようと挑んだのが前述の「環太平洋圏の華文学に関する基礎的研究」プロジェクトです。

このプロジェクトの一環として今年の春、カリフォルニア大学サンタバーバラ校（UCSB）にある世華文学研究中心（Forum for the Study of World Literatures in Chinese）と国際シンポジウム「台湾文学と世華文学専門研究会（UCSB International Workshop on Taiwan Literature and World Literatures in Chinese）」を共同で開催しました。学術発表のためにUCSBを訪ね、アメリカの大学生の発表を聞く機会にめぐまれました。それは「Made in Taiwan: Marginalized Voices within the Taiwanese Little Theatre Movement」と題した台湾の「小劇場運動」に関する研究発表でした。発表者は実際に台湾へ行って録画した舞台の映像を見せながら熱っぽい口調で語っていました。積極的な姿勢で新鮮なテーマを見いだした彼の視点のユニークさと燃えるような意欲が各国の研究者の好評を博しました。

秋にフィールドワークのために訪れたシンガポール国立大学（NUS）で出会った大学生たちも印象的でした。それを一言で言えば、どの学生も真剣に勉強に取り組み、一生懸命知識を吸収しようとするスタンスを持っているということ。写真をご覧下さい。

写真は、シンガポール国立大学の広いキャンパスに散在している canteen 風景です。ありふれた軽食売り場でしたが、そこに坐っている学生たちに目を向けると、パンやジュースよりも彼らが学習資料などの精神的な糧をもっと大事にしている様子がうかがえるでしょう。二言語教育などで国際的な競争力を強めているシンガポールの原点をここに見たような気がします。

不景気な今だからこそ、日本の若い大学生に、日本の将来を明るくすることのできるような大胆かつ斬新な発想、それを生み出す知識を勉強する意欲、それを実行に移せる行動力が求められているのではありませんか。

異文化コミュニケーションの むずかしさ

真鍋 晶子（経済学部助教授）

国際交流委員、また、留学生センター員として三年余関わってきた、ミシガン州立大学 MSU (Michigan State University)、および、ミシガン州立十五大学の連合体であるミシガン州立大学連合日本センター (JCMU: Japan Center for Michigan Universities) と滋賀大との交流について報告しますが、異文化間のコミュニケーションのむずかしさ・壁（個人的交流でも制度の点でも）に、今さらながらに驚いていますので、その点もお話しします。

MSU とは一九八七年の学術交流協定締結後、教員間の研究の交流は行われていますが、毎夏の語学研修は定着していても、短期語学研修の形以

上には、実質上滋賀大生に閉ざされてきました。セメスター単位でのアメリカ留学への道を開いて、滋賀大生にアメリカで勉強する機会をもって欲しいという一心で交渉を重ねてきました。また、アメリカ人学生が滋賀大キャンパスで学ぶことで、滋賀大キャンパスで居ながらにして国際交流が可能になることの実現も目指してきました。前者については、二〇〇三年秋セメスターからの滋賀大生の留学がほぼ決まりました。後者については、この三年間の経済学部長、学務委員会、教員、両学部後援会と留学生センターの協力のおかげで、二〇〇二年秋、彦根キャンパスで、「Japanese Economy and Business」という教育言語が英語である授業が実現し、二十六名の JCMU 学生が参加しました。（詳細は十一頁に掲載）

この間、滋賀大、JCMU 彦根センター、MSU 本部での実際の会議、e-mail、電話、ファックス、書面によるやりとりは何回を下らないでしょう。書き直しを重ねた協定文も私のコンピュータの中に次々と増えていきました。アメリカ側も日本側も是非早期に締結して、お互いの学生を送り込みたいと思っているのになぜこんな厄介なことになるのでしょうか。大枠では一致するのです。

九〇%以上は一致するのです。言葉のやりとりの一般的「語義」レベルでは一致します。ところが、それぞれの土地の制度、風土、慣習、文化の違い、簡単にいえば、ものの考え方、まなざしの違いが最終的にどうしてもずれるのです。ただ、まだ問題は残っているにせよ、前述の授業が実際に開講され、二〇〇三年からの見込みも立ったということとは、現実に国際交流の第一歩が踏み出されたわけで、互いに自己の立場を主張するだけではなく、「差・違い」を理解して、相手の要求を尊重し合



ミシガン州立大学の国際部の方々と

えば、少しずつ達成されていくのだと思います。こんなことは、個人レベルのつき合いで誰だつて経験していることでしょうか。自分でない誰かにつき合っていくには、常にこの葛藤（Aさんの「文化」とBさんの「文化」は必ず異なりますから）が存在するので、その延長にすぎないのでしょう。また、譲歩も必要になりますが、譲歩一方では、明治以降の日本の欧米への「なんとか外交」になりかねませんから、それは絶対に避けなければなりません。かといって横柄傲慢になつてもいけない。微妙な「あや」です。

具体的な問題は避けませんが、それぞれの国・州で長年にわたって成立してきた規則、文部科学省や州法が定めるものは、おそらく個々のレベルの理解を超えた妥当性もち、そのおかげで大学も存立してきたのでしようが、実際の交渉上はこれがくせ者です。規則、取り決めを成立させる底に脈々

として流れる暗黙の論理、暗黙の了解で裏打ちされていると思われる部分が、交渉上、表面化します。日本の考え方がある程度わかる私でも理解は出来るが納得いかない論理もあり、これをアメリカ側に伝えるのもひと苦労です。「暗黙の部分」を理解していないと、一体全体どこからそんな判断が出てくるのだという反応しか返ってこないことになります。しかしこれも、三年もたつとお互いにならり理解しあえるようになるもので、お粗末様なまとめですが、とにかく相手の立場に立つてものを見ようとすること、こういった些細なこととの積み重ねが、徐々に国際交流を進めるのだと思います。本学の学生さんも今後、留学という方たちだけでなく、国際化のなかで、様々に交流をされていくことと思いますが、このようなことを頭に入れていただければいいかなと思います。

滋チエン戦 アウェーゲームの厳しさを実感

平井 肇（教育学部助教）

二〇〇一年十二月、教育学部運動部連盟は、タイ国チェンマイ市に遠征しました。連盟役員、サッカー部、男女バスケットボール部、その他の運動部に所属する有志、引率教職員をあわせて、総勢五十四名が参加しました。六泊七日の滞在中、本学と学術交流協定を結んでいるラジャバット・インスティテュート・チェンマイとチェンマイ大学を訪問しました。

女子バスケットボール部は二勝、男子バスケットボール部は一勝一敗、サッカー部も一勝一敗の

成績でした。その他にも、バレーボールやセパタクロー、綱引きなどを一緒にし、剣道やムエタイ、舞踊などの伝統文化を披露しました。バドミントンやテニス、アーチェリーは、合同練習をしたりする機会もありました。

スポーツ以外でも、郊外の大学の施設に宿泊し、「大演芸大会」で盛り上がり、ゾウの訓練キャンプを訪問したりしました。現地の学生と親しくなつて、観光やショッピングに連れて行ってもらった人もいたようです。マンガや音楽、食べ物の話、即席「タイ語・日本語講習会」があちこちで開かれていました。帰国の際の空港は、タイ語のＴシャツを着た滋賀大生、滋賀大のＴシャツを着ているタイ人学生が別れを惜しみ大騒ぎでした。

この遠征（私たちは滋和戦をもじって滋チエン戦と呼んでいる）で、私が一番強く感じたこと、

それはアウェーゲームの厳しさです。

初戦のサッカーの試合でのことです。試合は前半四十分で行うことになっていました。前半二十分過ぎに滋賀大が得点をしました。それを境に、グラウンドの雰囲気が一変。檄を飛ばす監督、血相を変えてボールを追う選手たち。一方、今まで経験したことのないグラウンドコンディションに、照りつける日差し、長旅の疲れなどで滋賀大イレブンの動きは鈍ってきました。三十五分頃に同点にされました。四十分が過ぎて、なかなか主審が笛を吹きません。結局、ロスタイムが一 分近くあり、その間に二点取られました。後半は、相手が勝っていたので（？）ちゃんと四十分で終わりました。

バスケットボールの試合でも、アウェーゲームに戸惑っていました。体育館を埋めた観客は、われわれ滋賀大の一回を除けば、みな地元チームを応援します。選手は、試合中しきりにフロアを気にします。フロアが木でないため、滑るのです。トラベリングを取られ、止まろうとして余分な力が入るのか、足がつる選手が何人もいました。ベンチの選手が少ないので、交代もままなりません。点差がつくと、荒っぽいプレイになって、乱闘寸前と言う場面もありました。

選手は戸惑い、ぐったりして、中には不平を言う者もいました。しかし、これこそが、この遠征のねらいだったのです。気候の違い、グラウンド（フロア）コンディション、長旅の疲れ、異なるプレースタイル、決してピジターには有利な笛は吹いてくれない審判等々、アウェーゲームの厳しさは、普段の試合では味わうことができません。

最近、スポーツとのつきあい方は軟派になつていると感じます。その場が楽しければそれでいい、



女子バスケットボールの試合
滋賀大学（白）対チェンマイ大学（赤）
2001年12月チェンマイ大学体育館



スポーツ交流について報道された記事
(京都新聞 2002年12月12日)

辛いことやきついことはご免だとの風潮があるようです。しかし、スポーツの醍醐味は、辛いことやきついことに直面し、それを克服したときに感じる事ができるのです。運動部に入って日頃練習に取り組んでいる人は、そのようなスポーツの魅力を求めて練習に励んでいると思います。

しかし、滋賀大学の運動部が参加しているリーグ戦などでは、残念ながら、このようなアウェーゲームの厳しさを味わう機会はありません。話が少し飛躍しますが、これは日本のスポーツ界全般に見られる傾向です。日本選手が国際的な大会で、実力を十分発揮できない原因は、このあたりにあると言う人もいます。

ハンデイのある状況の中で、厳しさつらさを乗

り越えて、遅くなるのが大切です。そうすれば、今まで以上にスポーツの魅力を感じ取ることができるでしょう。滋チエン戦が、そのような貴重な体験ができる場となればと思っています。

なお、二〇〇二年十二月に、第二回目の滋チエン戦遠征が行われました。

タイのバディに感激

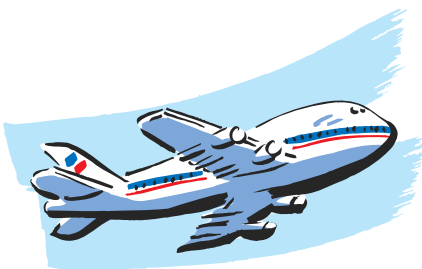
大川 良文(経済学部助教)

今年度、私は夏休みの海外研修『タイ・エコスタディツアー』の引率を担当させていただきました。このツアーは一九九九年から始まり、今年度で四回目になるのですが、今年度は八月十八日から九月三日までの十七日間の日程で、プリンス・オブ・ソンクラ大学パッタニ校(以下PSUパッタニ校)、チエンマイ大学、バンコクの三ヶ所を訪問しました。参加者は経済学部と教育学部を合わせて九名でした。今年度は、従来から行っている環境問題や少数民族に関する講義・実習に加え、パッタニではイスラム教に関する講義を受けた。チエンマイではタイで活躍されている日本人の方の講演を聞いたり日系企業を訪問するなど、いくつかの新しいプログラムを加えました。わずかに二週間余りの研修期間ではあったのですが、非常に充実した研修ツアーだったと思います。

このような海外研修を成功させるためには、共に引率を担当してくれた教育学部の奥田援史先生や私だけでなく、滋賀大学や現地の大学のスタッフの他、様々な方々の力が必要になるわけですが、その中でPSUパッタニ校とチエンマイ大学の学

生たちの力はとりわけ大きかったと思います。タイ・エコスタディツアーでは、滋賀大の学生と現地の学生との交流を図るために、現地の学生が滋賀大の学生一人一人にバディ(案内役)として付けてくれることになっています。日本を出発して、バンコク経由でジャヤイ空港に着いた時、PSUパッタニ校のバディ達が日曜日の夜にもかかわらず空港まで迎えに来てくれました。PSUパッタニ校のバディ達は日本語学科の学生達で、日本語がある程度しゃべれることもあって、ハジャヤイからパッタニへと向かうバスの中で、滋賀大の学生達とすぐにコミュニケーションをとることが出来ました。ツアー後に、ツアーに参加したある学生が「初めての海外で不安もあったけど、バディ達のおかげでその不安が吹き飛んだ」と言っていました。彼らの温かい歓迎と、素敵な笑顔のおかげで我々もタイという国にすんなり溶け込むことが出来たのです。その後も、バディ達は我々が講義や実習を終えた後に、観光地を案内してくれたり、民族楽器の使い方や簡単な民族舞踊を教えてくれたりと、たくさんの楽しい時間を共に過ごしてくれました。

私自身もツアー中に三十一歳の誕生日を迎えたのですが、そのことを知った彼らは私のためにケーキを買ってくれてハッピーバースデーの歌を歌ってくれました。おかげで素晴らしい誕生日を過ごすことが出来て、彼らに感謝しています。





ウェルカム・パーティーにてパディ達と

ほんとうに温かい歓迎をしてくれたタイのパディ達なのですが、実は我々がタイを訪れた時期というのは、彼らにとっては試験期間中だったので。これは、試験期間が終わると彼らの多くは大学から離れた実家に帰ってしまったためなのですが、彼らは試験勉強もしなければいけない中で、これだけのモチベーションをしてくれたのです。彼らに聞くと、我々と夜の十時過ぎくらいまで共に過ごしてくれた後、家に帰って深夜まで試験勉強をしているということ、我々もびつくりしてしまいました。もし反対に我々が試験期間中に海外からの学生たちを案内しなければならなかったら、ここまでできるのだろうか？とツアーに参加した学生とも話をしたのですが、とてもできないよねと更にパディ達への感謝の思いが強くなりました。パディ役を引き受けた学生たちは、日本

滋賀大学の協定締結校等

大学間交流協定締結校

ミシガン州立大学〔アメリカ合衆国〕
 ディーキン大学〔オーストラリア〕
 湘潭大学〔中国〕
 チェンマイ大学〔タイ〕
 ミシガン州立大学連合〔アメリカ合衆国〕
 プリンズ・オブ・ソクラ大学〔タイ〕
 東北財経大学〔中国〕

部局間交流協定締結校（教育学部）

タイ国地域総合大学（ラジャパット・インスティテュート）〔タイ〕

海外派遣留学生派遣相手大学

ミシガン州立大学〔アメリカ合衆国〕
 国費による派遣留学及び私費による語学研修
 ディーキン大学〔オーストラリア〕
 国費による派遣留学、私費による短期派遣留学及び私費による語学研修
 湘潭大学〔中国〕
 私費による語学研修
 グラスゴー大学〔イギリス〕
 国費による派遣留学
 ワイカト大学〔ニュージーランド〕
 国費による派遣留学
 タイ国地域総合大学（ラジャパット・インスティテュート）〔タイ〕
 国費による派遣留学
 チェンマイ大学〔タイ〕
 国費による派遣留学及び私費による語学研修

に関心があるからパディ役を引き受けたわけ、そんな彼らにとって、日本からの来客との時間は試験勉強をある程度削る価値があったのだらうということは想像できるのですが、そのような打算を超えた優しさ・素直さがなければあれだけのモチベーションはできなかったでしょう。このツアーで学

生たちは、環境問題や民族・宗教問題など色々なことを勉強しましたが、タイのパディ達の見せてくれた心の優しさ・素直さといったものも感じ取ってほしいものだと思います。それこそが、国際交流・異文化交流の基盤となるはずなのですから。

世界に向けた環境教育

水環境を主題とする

環境教育コース

川嶋 宗継（教育学部附属環境教育
湖沼実習センター教授）

国際協力事業団（JICA）の委託を受けて、教育学部附属環境教育湖沼実習センター（研修指導担当）と（財）国際湖沼環境委員会（指導運営担当）は、「水環境を主題とする環境教育コース」を二〇〇〇年度から開始しました。特に開発途上国では、地球規模の環境問題に加え、水質汚染、森林破壊、廃棄物問題など深刻な環境問題を長期的な視野に立つて解決していく必要に迫られています。それらを解決するための手段として、

環境技術の利用や行政的手段がとられてきてはいます。が、社会全体での取組の強化および長期的な効果の確



琵琶湖での実習

保のためには、地域住民、次世代を担う若者や子ども達への環境教育が必要かつ重要です。しかし、これらの国においては環境教育の指導者は十分に確保されておらず、指導者育成に携わる大学教官も質・量ともに十分ではありません。こういった背景において、指導者育成の支援を行うことが環境教育の裾野拡大につながり、環境問題の解決、生活水準の向上に寄与すると考え、数年前から、本コースの実現に向けてJICAと議論をしてきました。政府開発援助のあり方の中で人材育成が強調されるようになり本コースが実現しました。環境教育に関するはじめての研修コースです。

毎年、開発途上国から高等教育に携わる若手教官、地域における指導者八名を研修生に迎え、約五十日間の環境教育の研修を行うという事業です。本年、十月に第三回目のコースを終えました。プログラムは、大まかな流れとして、環境教育序論、環境問題基礎、環境教育教材開発・実践、環境教育に関するトピック、ファイナルレポート発表、と進みますが、間に、カントリーレポート発表、ホームステイ、上水道・下水道処理場見学等が入ります。また、教育学部附属中学校の協力を得て、学校の取組に関する講義の他に、環境学習や国際理解教育の授業参観を行



附属中学校での様子

ついでに、さらには、今年度から研修生と院生・学生とのディスカッションの時間を設けました。研修形式は多彩で、講義・演習の他に、実験を取り入れたり、琵琶湖調査をはじめとして野外実習を多く取り入れたりしています。講師陣も多彩で、本学からは、遠藤修一教授、木全清博教授、木島温夫教授、近藤学教授、堀越昌子教授、山崎古都子教授、市川智史助教授、佐野静代助教授、只友景士助教授、水上善博助教授、與倉弘子助教授に参加いただき、さらに、東京学芸大学、地球環境戦略研究機構、滋賀県立大学、国連大学、ラムサールセンター、琵琶湖博物館、琵琶湖研究所、滋賀県、草津市等から環境問題や環境教育の専門家の協力を得て、充実した内容のプログラムが展開できています。

評価会や研修生に対するクエスチョナアを通して、毎回、研修生から

「環境教育の重要性が理解できた」、「研修したことを自国で活かしていきたい」等々の感想とともに、JICAからも充実したコースであるとの高い評価を得ています。さらに、研修生がファイナルレポートの課題として作成した行動プランや学習プログラムが実施される段階で、研修生が活動している地域を訪問してフォローアップ事業を展開していくという計画も進行中です。コースリーダーとして、本研修がそれぞれの国・地域における水環境問題の解決に少しでも役に立つことを願うとともに、一層充実したプログラムの実施に向けて努力をしていきたいと思っています。

過去3回の研修期間と参加国

研修年月日	参加国
2000年9月25日～11月7日	スリランカ、タイ、中国、パキスタン、フィリピン、マレーシア、モンゴル、ラオス
2001年9月24日～11月21日	インドネシア、ガーナ、カンボジア、コロンビア、バングラディッシュ、フィリピン、ラオス
2002年9月2日～10月27日	ガーナ、カンボジア、コロンビア、タイ、パナマ、フィリピン、ラオス



小田野教授の授業

日本の経済・経営を
英語で講義

伊藤 博之（経済学学部助教授）

平成十四年度秋 semester に開講された Japanese Economy and Business（以下、JEBと略記）は、私どもにとっては英語によるリレー講義という初めての試みです。この講義は彦根市に所在するミシガン州立大学連合日本センター（以下、JCMU）やその母体であるミシガンの州立大学と滋賀大学との間で、講義シラバスの内容を含めた協議を経て計画された講義です。このようなかたちで

の海外の大学との緊密な協力は、全国的にも珍しい試みではないかと考えています。今回機会を頂戴したのを幸いに、このJEBを終了したご報告をさせていただきます。ただし、ここでの記述は私個人の感想であり、リレー講義の他の担当者の意見を必ずしも代表するものではないことをあらかじめお断りさせていただきます。

さて、JEBには、JCMUに滞在しているアメリカ人大学生のほぼ九割にあたる二十六名に、公開講座受講者と滋賀大学の学生という多様な受講者を加えた約四十名を講義に迎えました。JEBの目的は、日本経済やビジネスについての簡潔かつ体系的な知識を英語によって提供することでした。そのために、経済小田野純丸教授、ファイナンス（丸茂俊彦助教授）、経営（伊藤博之・筆者）、マーケティング（林廣茂教授）、会計（宮西賢次助教授）という多様な分野を専攻する教官が相互に情報を交換しながら、入門的でありながらも体系的な講義を設計しようと努力しました。しかし初めての試みということもあり、受講予定のアメリカ人学生が日本経済について、どの程度の予備知識や関心をもっているかが事前に不明でした。そのため、複数の学生のレベルを想定した講義プランの用意をする必要がありました。



また、最初の講義で得た情報を担当者間で共有し、それによってその後の担当者は講義プランの調整を行ったりしました。このように講義の担当者にとっては、通常の講義よりも苦労が多いものではありませんでしたが、講義を終了してその甲斐はあったように感じています。

まず、講義において積極的に質問や意見を述べるアメリカ人学生の受講姿勢は、滋賀大学の学生には刺激を与えたと思っています。また、留学を志望している学生には、英語での講義の雰囲気や少しは疑似体験できたのではないのでしょうか。また、講義という共通の日常空間を共有することで、日米の学生の間にも自然な形で親交が生まれたようにも感じ

ています。このような日常的な経験の場を提供することが、本学の国際交流にとって極めて重要であることを再認識しています。

一方で、英語での講義という制約のため、本学学生の受講者数がやや限られていたことは残念に思っています。また、そのほか改善すべき課題もいくつか担当者の間でも議論の遡上にあがっています。例えば、英語に興味がある学生以外にも、日本経済やビジネスについてアメリカ人の大学生と意見を戦わせてみたいという学生の受講を呼びかけることや、講義においてもっと活発に滋賀大学の学生とアメリカ人の学生が討論するような機会が設けられないかというような課題です。もちろん、学生の語学能力や講義の時間上の制約などで実現が困難な点もあります。しかし、JEBは、今後二年間継続して開講される計画であり、今回の講義の総括を踏まえてよりよい講義としたいと考えています。また、JEBが二年後に終了した後は、新規の英語科目が開講される予定ですので、その後の英語講義のためのノウハウを蓄積する必要があります。そのために、JEBの講義資料等を留学生センターなどの機関に保存することも重要であり、滋賀大学の知的資産として保存・活用していきたいと考えています。

『総説 現代社会政策』

成瀬 龍夫

(経済学部教授)

二〇〇二年九月に著書『総説 現代社会政策』を、東京にある社会科学専門書の出版社である桜井書店から出した。このたびの出版については、少なからず私の思い入れがある。

経済学部の政策系列の伝統的な講座科目は、経済政策と社会政策である。滋賀大学経済学部にも講座が設けられたのは昭和四十年代のことであるが、社会政策原論の講義を初代に担当されたのは、故河野稔教授で、その後を美崎皓教授が引き継いでいた。美崎教授がご病気で亡くなられた後、平成七年度から私が担当している。

自分が授業を担当する段になって感じたのは、社会政策のテキストに関する悩みである。既存の教科書には内容的に古い事項に力点を置きすぎたもの、教科書としての総合性や体系的に弱いもの、国際的動向への説明が少ないもの、社会政策の近年の動向とそれに関する研究の状況が取り上げられていないことなど、さまざま不満があった。そのため、いずれは自らきちんとした教科書を用意する必要があると考えていた。しかし、一人で行い組むにはそれなりの逡巡もあった。しかし、意を決してこのたびそれを一定のかたちで実現することができた。

本書の章別構成は、第一章社会政策の原理、第

二章社会政策の公準、第三章社会政策の歴史、第四章労働時間と社会政策、第五章賃金と社会政策、第六章労働市場と社会政策、第七章社会保障の原理と制度、第八章少子・高齢社会と社会政策、第九章福祉国家と福祉社会、第十章二十一世紀の社会政策、となっている。

内容の面では、①社会政策に関する定義を市場



原理との関係で試みたこと②社会権、国際労働基準、ナショナル・ミニマムなど五つの政策公準を提示したこと③社会政策の動向をめぐる重要なトピックスを取り上げたこと④社会政策に関する二十世紀の到達点と二十一世紀の課題を展望したこと、など筆者なりに特色を挙げる事ができるが、結果的には学生用教科書としては難度が高く、社

会政策に関する専門的研究の入門書のようなレベルのものとなった。

二〇〇二年十月の秋 semester の授業で早速教科書として使い始めたが、学生諸君には講義内容の全体をまず把握してもらうことができるようになり、講義の質を大きく改善できたと思っている。

本書の執筆時期は、経済学部長二年目の二〇〇一年七月から二〇〇二年五月までの十ヶ月で、私としては初めての書下ろしである。一年目にも十ヶ月ほどをかけて『国民負担のはなし』(自治体研究所)を出版した。出版後に、同僚たちから「公務多忙であったのによく原稿が書ける時間があつたね」と聞かれるが、出張などがなかった土日は自宅で終日ワープロを叩いていた。むしろ、公務専念の時期であつたからこそ書けたという逆説を実感した次第である。



『風景の哲学』

安彦 一恵

(教育学部教授)

三年前に発足した環境教育課程で「ランドスケープ論」という講義を担当している。この講義との関連で「風景」をテーマとした研究をも進めているが、昨年十月に、佐藤康邦氏（東京大学）との共編著で『風景の哲学』（ナカニシヤ出版）を出版した。その「まえがき」でも記したことだが、「風景」についてはすでに多数の著作が出版されている。しかしながら、その多くは、自分の風景感をそのまま表出しただけで極めて主観性の強いものとなっているか、あるいは、学問的研究として客観性はもつが個別学問的方法性が前面に出過ぎていて我々が（日常）「風景」として意識しているものとはズレたものの分析となっているかのいずれかである。本書は、この「客観性」と「風景の本来性」とのディレンマを「哲学」という武器を用いることによってなんとか解決しようと思ってみたものである。

抽象的に言うなら、「風景」とは世界の或る「姿」である。それは、それ自体であるというより、主観（人間）と相関的に存立している事態である。私の基本テーゼは、さらに、この相関性の或る一定のかたちとして「風景」が成立してきたというものである。だから、「風景」は歴史的なものであって、端的に近代に固有のものだと私は考えている。

私は、（近代）科学とこの風景とは同じ一つのことの両面であると考えている。科学的な世界の

見方と風景という世界意識とは、対立するものなどではなく、世界を科学的に見るようになったこととのその原因が同時に世界を風景として現出させているのである。「風景の保護」といったことも語られているが、だから、「そのためには科学への信奉を止めなければならない」といったことはまったくの出鱈目なのである。



「風景の保護」を語るとき問題なのは、「よい風景」とされるものが人によって異なることである。そこに紛争が生じてくることになるのだが、私の現在の関心事は、この紛争の解決の方途を提示することである。現時点では例えば、専ら「環境問題」について適用されているCVM（およびコンジョイント法）を「風景問題」にも適用できるようにすることなどを考えている。

これは社会科学全般の課題でもあるのだが、特に「風景」については、具体的方法を構築してい

くに先立って（純）理論的に解決すべき問題点がなお残っていると私はみている。その一つはイデオロギー性の問題である。「よい風景」の発言はその多くがイデオロギー性を伴っている。それは、広く「文化」意識のイデオロギー性の一部である。イデオロギー性をもっているので「紛争」はまさしく紛糾するのであるが、私の基本的方向は脱イデオロギー化ということにある。「よさ」の確定、あるいは「よさ」の追求の権利範囲の確定に、なんとか客観的原則を提示したいと考えている。

「どうしてお前が風景などを研究しているのか」と同業者達に言われたりすることもあるが、こう述べてくると私の本業のメタ倫理学研究とも通底しているのが了解していただけたらと思う。メタ倫理学としては、私は近年、倫理を（ちよつと）「法」と同様に（一つの）汎用的「道具」とみるか、それ自身一つの（個別的・自己目的）活動性とみるか、という観点で倫理観を二分できると説いているが、右の脱イデオロギー化はこの後者の倫理観の否定と平行的なものでもある。



自然をこよなく愛し、ゆったり暮らす

神山 保 (教育学部教授)

二〇〇二年三月からドイツの中西部ノルトライン・ヴェストファーレン州にあるユーリヒと言う小さな町に滞在しています。この州にある大きな町としてはケルンとデュッセルドルフ、ボンがあります。ユーリヒ南東部に広がる林の中に設置されたユーリヒ研究センターの一部門である固体物理研究所理論部門のComper教授のもとで複雑液体の研究をしています。本在外研究では両親媒性高分子(水と油の両方に溶ける高分子)により形成された膜の相転移に関して共同研究を行う機会を持つことができました。膜の弾性や形態変形はメゾスケール



サイクリングする元気な老人達

でおきますが、膜の厚みはもつと小さなスケールのため、膜をどのように数学的に扱うかが問題になります。Comper教授は光散乱の実験にもとつき対称性から自由エネルギーを導き、多くの実験事実を説明してこられました。私はより小さなスケールでの分子模型からこの自由エネルギーの形を決める研究を以前から進めてきております。またこの自由エネルギーの表現では、熱揺らぎによる影響を求めることができないので、膜を三角格子に区切り格子点の動きをモンテカルロシミュレーションで求めるといふ計算も共同研究として行っておりです。この方法を用いると膜の流動性を扱うことができるので、流動部分と結晶部分が共存する膜で生じる発芽現象を解析しています。

この研究所にはいろいろな国から研究者が来ています。昼食時には同じ研究室の者が集まり食堂へ行きます。私の属するグループは食事とコーヒーに一時時間を費やします。その間たわいのない話をしますが、各国の様子がわかるので私にとっては興味深い時間になっています(サッカーのワールドカップが行われていた際には、試合に関係する国の人をからかって大いに盛り上がったのは勿論です)。



モンシャウにて

先日はイランからきた人が家族の話をしました。芸術家のお父さんが、いかに言論弾圧を受け、家族がどのようにドイツに渡ってきたかという話をしていました。研究室スタッフからは時々研究所の内部事情について話されます。政権が変わってから研究所の予算が厳しくなつたと聞きます。科学予算が減っているのでも、所内でも各部門が存在意義を強く主張しなければならぬようです。

ドイツではどんな小さな町にも教会があり、その前に広場があります。広場では朝市が行われ、週末にはフリーマーケットが開かれたり、時には移動式遊園地も来ます。町の催しも広場が中心になります。広場の周りにはレストランがあり、夏場には広場にもいっぱいテーブルを出します。ドイツ人は飲み食いが大好きなようで、何人かが集まれば楽しそ

うに話をしながら長時間テーブルを占有しています。大きい広場ではこのような人たちの多さに圧倒されます。また広場は旧市街にあり、一方通行やその他の制限のためあまり自動車は走っていません。それでほとんど車の走っていない安全で落ち着いた町が作られています。町は人のためにあるということを実感します。広場の近くには多くの店がありますが、営業時間は厳しく制限されています。日曜日はレストランやガソリンスタンド以外は完全に休みで、土曜日午後四時には閉店します。閉店十分前には放送で閉店のことを告げ、五分前には電灯を消しだします。閉店五分後にはレジ担当者も帰宅しだします。ある日散髪屋に行ったとき、閉店一時間前に入ったのに散髪が間に合わないからと断られました。客へのサービスより自分の休み時間の方が大事だという考え方で日本とは逆です。休みにしてもドイツでは年休を二十日以上とらないと法的に問題になるようです。このように自分の時間を極めて大切にしているドイツ人ですが、ドイツ経済が日本より劣っているとは思えません。日本ではかなり多くの余計なことがなされていて、空回りしているのと同じ思いがあります。

自然をこよなく愛し、ゆったり暮らすドイツ人の生活や考え方には学ぶことが多くあるように思います。

ミシガン研修を終えて

二〇〇二年八月二十六日～九月二十三日

ミシガン州立大学夏期語学研修に参加

直正 恵美子（経済学部二回生）

この企画に参加して、構えずに英語でコミュニケーションが取れるようになってきました。会話力がアップしたというわけではありません。たぶん、一ヶ月の間、英語に囲まれ、何とかしゃべろうとしているうちに、耳と頭が英語に慣れたのだと思います。

月曜から金曜まで、朝の九時から昼の十二時半まで授業がありました。ロクサンという若くて、熱心な女の先生に、クラスを受け持っていたきました。授業の内容を説明すると、大体、次のような感じです。はじめに、ロクサンに、前の日にあったことを話し、わからなかったことを質問します。たとえば、レストランに行ったのだが、チップのことがよくわからなかったというようなことです。次に、その日の内容に入ります。内容は、バスの乗り方や、ホームステイ先での振舞いなど生活に役立つもので、それを、グループに分かれてスキットを作り発表しました。最後のほうはディスカッションもしました。ロクサンとは、普段の授業から、週末の旅行まで、毎日一緒にとても仲良くなりました。ロクサン宅で、日本料理のパーティーもしました。

このプログラムで、とてもよかったと思ったことは、ミシガンの生徒と、OJJC（沖縄ジュニアカレッジ）の生徒と組んで、カンバセーションの時間があつたことです。カンバセーションパーティーのパーティーに参加したり、食事に行ったりと、リアルなアメリカン学生生活に触れることができました。向こうの学生は、一軒家をシェアしていて、金曜の夜は、どこに行ってもパーティーです。OJJCの生徒は、とても活発にアメリカ人と交流していて、とてもいい影響を受けました。カンバセーションパーティーとは、その後も連絡を取っていて、



ナイアガラの滝にて
（向かって一番右が筆者）

この冬、日本に遊びに来ました。九月は、ちょうど大学で、アメリカンフットボールのシリーズが行われている時期です。私は、カンバセーションパーティーに頼んで、チケットを取ってもらい見に行きました。試合の日は、一日中ものすこい盛り上がりでした。三時から始まるのですが、朝から、スタジアムの前でパーベキューをして騒いでいます。白のTシャツが味方で、緑のTシャツは敵ときまつていました。緑のTシャツを着ている人は、プーイングにあつていました。もちろん、スタンドは、白のTシャツで埋め尽くされていました。応援は、振り付けがあつて、楽しかつたです。試合は、惜しくも負けてしまつたけれど、最後までどっちが勝つかわからない、面白い試合でした。

週末は、シカゴ、ナイアガラの観光と、ホームステイがありました。シカゴは、とても面白い町で、想像していたのとは違つて、安全で、人も親切でした。もっと長く、滞在していたかつたです。ナイアガラの滝では、ボートで近くまで近づくのですが、ずぶ濡れになってしまいました。ホームステイは、二泊三日で、ホストファミリーの家に泊まりました。ホストファミリーは、ジュリーとルイスという退職した夫婦でした。一日目は、自己紹介と、息子のティムを呼んでのパーベキューでした。二日目は、孫のサッカーの試合を見に行き、それから、ミシガン湖の別荘に行きました。ミシガン湖

は、海みたいに広く、ビーチの砂がきれいでした。三日目は、教会に行き、食事を楽しみました。三日目になって、ようやく、ホストファミリーと、笑いながら、楽しく会話ができるようになりました。

一番疲れたのは、車の中での会話でした。尋ねられるのは、日本のことでした。食事から、東京の人口数、気候、法律の制度まで、幅広く聞かれました。英語で答えることができるかという以前に、知らないので答えられないことがたくさんありました。よく言われる「日本のことをもっと知らなくてはいけない」。これは本当でした。私が出会つたアメリカ人はみな親切で、いい人たちがかりでした。私の間違っている英語を我慢強く聞いて、意味を察してくれました。アメリカの人の生活で、気に入つたところは、目が合えば、「Hi」と、声をかけ、店では、店員とスモルトークをし、ドアを次の人が入りやすいように持つていたといった、ささいなところがいいなと思いました。

九月十一日には、教会に行つたり、デモに行つたりと貴重な経験をする事ができました。このプログラムを終えて、もっといろんな国に行つてみたい、もっと長く滞在したいと思うようになりました。次は、一人旅に挑戦したいと思います。最後に、一緒に行つた友達、先生、向こうで出会つた人たち、ありがとございました。

ボート部（教育学部）

ボートという競技は野球やサッカーと違い、あまりメジャーな競技ではありませんが、だから、入部する新入生のほぼ全員が初心者で、練習計画や新入生指導などは、試行錯誤しながら活動しています。

新歓活動でのボートの試乗会では、ボートに乗ったほとんどの新入生から「風が気持ちよかった」とか「思ったよりすぐ速かった」などをよく耳にします。初めて乗ったときの爽快感、そしてなによりも「移り変わっていく周囲の風景がすばらしかった」と答えます。

ボートはいくつもの種目に分かれており、私たちの部では、男子は主にフォアを組んでいて、女子はクォドルブルを組んでいます。フォアというのは一人一本ずつオールを持って、四人で漕ぐ、舵手付の種目です。クォドルブルは一人二本ずつオールを持って、四人で漕ぐ、舵手付種目のことです。ボートというと腕で漕ぐイメージがありますが、足を主に使って漕ぎます。だから、漕手は強靱な足腰が必要となってくるのです。そして、なんとと言ってもボートは、チームワークが必要な、究極の団体競技と言えるのではないのでしょうか。ですから、

男子は三月から十一月までのシーズン中はこのチームワークを高めるためや、早朝練習のために、週三回御殿が浜合宿所で合宿を行っています。

部員の減少が深刻になりつつありますが、ボート部の暖かな雰囲気の良いさは絶対に守って行きたいです。ボートは本当にすばらしいスポーツだと思います。滋賀大ならではのクラブです。大学で何もやりたいことが見つからない、分からなくなった人は一度気軽にボートに挑戦してみてくださいでしょうか。きっと大学生活の貴重な宝となります。

布施 芳樹（教育学部二回生）



電子計算機クラブ（経済学部）

「電子計算機」と聞くとなんだか怪しいイメージを持たれるのではないのでしょうか？確かに工学系の大学であれば、アセンブラやC言語で難解なプログラムを組んだり、機械を解体してコンデンサやチップを弄ったりしているかもしれません。しかし、私たちは経済学部の電子計算機クラブとして、PCをより便利に、より楽しく利用することを目的として活動しています。決して怪しいクラブではないと思います、きっと。

普段の活動は、部室に常備しているPCを利用して行っています。PCの性能が飛躍的に向上している今日では、部員の活動も多様化しており、WebデザインやCG、DTMなど、各分野に興味のある部員数名が集まって個々に活動しています。時には授業の課題を教えあったり、ゲームを楽しんだりもしています。また、対外的にも滋大祭や新緑祭での教室展示や模擬店の出店、情報処理センターでの講習会など積極的な活動を展開しています。

電子計算機クラブに所属していると、何よりも情報管理学科の授業に強くなりまます。各分野に大抵は一人や二人はスペシャリストがいますので、彼らを存分に活用して、一歩進んだ知識を身につけられます。これに加え、情報処理技術者資格を取得するのにも非常に有利です。基本情報技術者や初級システムアドミニストラータをはじめとする各種資格の取得者が、これから挑戦しようとする方を強力にバックアップします。

学内ではいまいち認知度の低い電子計算機クラブですが、今後は対外的な講習会の更なる充実や学祭の教室展示での研究発表、更に滋賀大学Webサイトの制作請負などで、私達の存在を、私達が単なる謎のコンピュータマニア組織ではないことを、地道にアピールしていきたいと考えております。

相川 昌裕（経済学部二回生）



長沢工 著

『流星と流星群』

流星とは何がどうして光るのか

地人書籍（一九九七年）



流れ星は今も昔も人々を魅了し続けている宇宙からの贈り物です。現代では、流れ星は宇宙から地球に降り注ぐものと当然のように知られていますが、昔は宇宙から来ているのか、それとも地球起源なのかよく分かっていませんでした。その流れ星の起源を知るために、様々なアイデアや苦労の下、流れ星の観測が行われてきたのです。この本では流れ星とはどんなものであるかについて書かれているだけでなく、流星観測の歴史にも触れています。私がこの本を読み、特に先人達のアイデアの素晴らしさに感動したものを一つ紹介します。それは二十世紀前半にかけての話です。

流れ星が太陽系内の物質か、それともはるか遠くの恒星空間から旅してきたものか、それとも地球起源のものかを突き止めていくには、流れ星の『速さを知る』必要があります。『速さを知る』、文字に書けばたった五文字の簡単な言葉で

すが、多くの人たを悩ませてきた問題

でもあります。皆さんもどのようにすればよいか想像してみてください。速さを知るには、流れ星が光っている時間とその間に動いた距離を知る必要があります。

距離を知るには、まず星空の中を動いた角度を二点観測から知らなければなりません。では、光っている時間はどのように

よう。流れ星を見たことのある人は実感して頂けると思いますが、一瞬の内にス

イツと光り消えていく時間を計るとい

のは容易なことではありません。そこで、

エストニアのエービクという人が、独特

の観測法を考えました。それは、〇・一

秒という短周期で振動させた平面鏡を使

って流れ星を観測する方法です。通常ま

つすぐに流れる流れ星が、この振動した

鏡の中ではらせんを描きながら流れます。

このらせんの数を数えることで流れ星の

見えている時間を測定することができます

のです。実のところ、これらの観測で得

られた速度は精度のよいものではありません

でした。しかし、私は、エービクの

アイデアに素直に驚かされました。この

本では、そういった先人達の考え方や発

想も一緒に楽しむことができます。

流星群の時期以外にも流れ星は毎日

流れています。しかし、最近ではなか

か見ることがなくなつたのではないでし

ようか。それは夜空が明るくなつたせい

もあります。また星空を眺めるとい

間や余裕がなくなつてきていることもきつと

あるでしょう。月夜でなければ、滋賀大

学からも流れ星を見ることができ

この本を読む一休みに、ビールでも飲

みながら夜空を眺めてみてはいかがでし

ようか。

大山 真満（教育学部講師）

森嶋通夫 著

『思想としての近代経済学』

岩波新書（一九九四年）



著者は、「世界のモリシマ」である。森嶋通夫教授は、日本が世界に誇る「経済学のスーパースター」の一人である。もう二十年以上も前から、ノーベル経済学賞候補者に挙げられていたと聞いている。

「マルクスは偉大な学者です。何故なら、マルクスは死後百年経つた今日においても、学問的になお生き続けているからです！」これは、一九七一年のニューヨークの国際学会の招待講演の中で、森嶋先生が最後に力説された言葉である。その途端、聴衆全体が一斉に立上がり、万雷の拍手が何度も鳴り響いた。当時、留学生だった私は「森嶋先生は凄い学者

だ。日本の経済学も捨てたものではない！」と痛く感じたものだった。

そういう物凄い「世界のモリシマ」の英気が、『思想としての近代経済学』の隅々に満ちみちているのだ。本書の切

口は、初めから終りまで例の「森嶋節」である。

「毎度のことだが、妻は各章の原稿

を読んで、書き改めをしばしば勧告した。

激論になったこともあったが、いまでは

彼女の意見のほとんどすべてに従つたこ

とは賢明だったと思つている」

「効用極大、利潤極大の行為だけが

合理的な行動ではない。商人の

信用 を重んじる行動も合理的だし、

官僚や会社員の行動も世合理的である。

労働市場や土地市場は、極めて人間的・

社会的な市場である」

「高田保馬の勢力論やウーバーの

官僚制の研究を発展させ、経済学に取り

入れることが必要であると思う。いずれ

にせよ、二十一世紀では経済学と社会学

は非常に密接な学問になるに違いない」

我々はすでに二十一世紀に突入して

いる。経済は停滞し、経済学も閉塞状態

にある。「モリシマに続け！」これが

本書の紙背に流れるメッセージである。

第二の森嶋、第三の森嶋が日本から輩出

することを期待したいと思う。

酒井 泰弘（経済学部教授）

大学院経済学研究科に

博士後期課程

「経済経営リスク専攻」を設置

本年四月に、大学院経済学研究科に博士後期課程「経済経営リスク専攻」が設置されることになりました。

あらゆる実業の世界では、リスクが経済活動の基本的な構成要素の一つをなし、リスク・マネジメントなくしてその本来の活動と目的が達成できないということは、今日広く認められています。

本専攻が養成をめざすのは、経済学及び経営学に基づき体系的、総合的なリスク分析能力とリスク管理能力を備えた、国際的に活躍出来るグローバル・スペシャリストとしての「リスク・マネージャー」です。経済活動に伴うリスクに対応できるリスク・マネージャーの養成には、単なる実務能力にとどまらず、リスクと創造性についての高度の専門技術と先端の研究をふまえて、自立した研究能力が必要とされます。それは、こうしたリスク・マネージャーが、自ら積極的に社会の新機軸を切りひらく独創性を持った社会人でなければなりません。

私たちは、経済学および経営学をベースとし、「リスク基礎」、「リスク管理」、リスクをふまえて企業創造と地域創造を研究する「リスクと創造」の三教育研究分野を内容とする、社会人を対象とした大学院博士後期課程「経済経営リスク専攻」を本研究科に新たに設置し、学生を募集することにいたしました。本専攻は、社会科学系でリスクを中心とした大学院としては、我

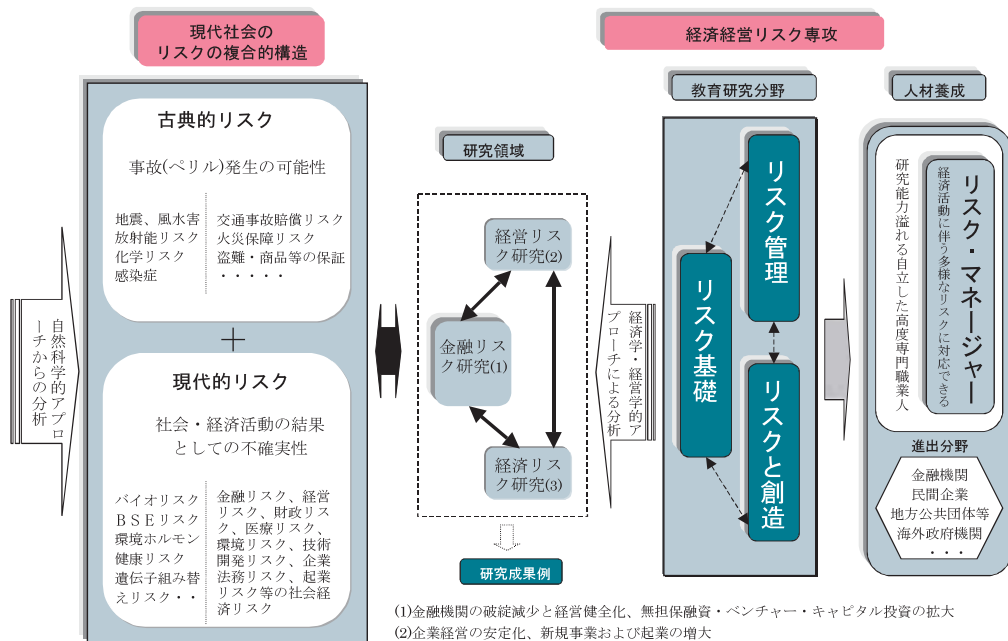
が国では最初のものとなります。本専攻の研究領域・教育研究分野・人材養成については、下図をご参照ください。

これまで経済学研究科では、昭和四十八年度から修士課程を経済学・経営学二専攻で発足させ、平成十三年度には専門職業人の養成に力点を置いたグローバル・ファイナンス専攻を発足させ、修士課程レベルでの大学院教育を行ってきました。

このたび、博士後期課程「経済経営リスク専攻」を設置することにより、研究科は博士前期課程（従来の修士課程）と博士後期課程から構成されることとなります。前期課程と後期課程とは専攻構成は異なりますが、大学院の教育課程は、経済学研究科として一貫した教育ができるように、柔軟で個性的な組み立てとなっております。本博士後期課程では、「博士（経済学）」あるいは「博士（経営学）」の学位を取得することができます。

今年、四月二日～四日が入学願書の出願期間で、四月十二日（土）に入学試験を実施いたします。どうぞ

経済経営リスク専攻における
研究領域・教育研究分野・人材養成



- (1)金融機関の破綻減少と経営健全化、無担保融資・ベンチャー・キャピタル投資の拡大
- (2)企業経営の安定化、新規事業および起業の増大
- (3)社会経済システムのセーフティネットの構築、新国際秩序の確立、地域の活性化

ぞ、本研究科博士後期課程の趣旨と特色をご理解いただき、二十一世紀社会を切りひらくこととする研究意欲にとんだ多くの方々の入学をお待ちしています。

北村 裕明（大学院経済学研究科長）

近江の散歩

「融神社」

大津市のJR雄琴駅から歩いて約一時間ほどの比叡山の麓、伊香立南庄というところに融神社という小さな神社があります。整然とした柵田の一角にひっそりと立っています。辺りには取り立てていっほどのものは何もありません。参道の杉木立の奥に小さな社殿があるだけです。人通りも車もほとんどありません。あるのは、ただ静かさだけです。

「融神社？ 一体それ何？」と怪訝に思われる方が多いでしょう。融神社は嵯峨天皇の第十八皇子、源融を祀る唯一の神社だそうです。当地が、その昔、融公の荘園であったことからここに



られたのでしよう。信長の焼き討ちなど何度か消失したそうですが、寛政九年に再造営され現在に至っているとのこと。融公は、源氏の姓を受

け、後に左大臣に任せられます。

また、平安初期の歌人として知ら

れ、古今和歌集巻十四に「みちのくのしのぶもぢずり誰ゆゑに、みだれむと思ふ我ならなくに」という歌が河原左大臣の名前でおさめられています。

源融は、かなり華麗な貴族生活を送っていたようで、みちのくの千賀の塩竈（しおがま）にあこがれて、六条河原院にその景色を移し、そこから世に河原左大臣と呼ばれるようになった話が伝えられているほど「数奇」ものでもあったようです。源融は、あの源氏物語の主人公、光源氏のモデルだといわれているようですが、その出自や派手な生活ぶり、それに歌のうまさなどからそのようにみられているのでしょうか。

昨年、町内会のリンゴ狩りの途中、一休みしたのが融神社でした。意外なところに意外なものが、という小さな発見という感じでした。春先には、神社までの道すがら、きれいに咲き誇る菜の花が楽しめるそうです。その時にもう一度立ち寄ってみようと思っています。みなさんもいかがですか。



門脇 延行（経済学部教授）

報道された主な記事（十月～十一月）

- | | | |
|-----|--|---|
| 十月 | 近江の旅文化紹介 中山道制定四〇〇年で企画展 絵図や日記など17点 附属史料館（朝日（10・8）他） | （京都（11・12）） |
| * | 統合問題を考える 滋賀、滋賀医など4大学 草津でシンポ（中日（10・14）他） | 子どもの相談相手は学生に ボランティア 児童補導員 西池崇康さん（滋賀大3年）（読売（11・12）） |
| * | 京都レガッタ 滋賀大、接戦制す 一般女子がけ付きクオドルブル 教育学部・風（京都（10・15）） | 大学改革 自発的努力が必要 宮本憲一学長（京都（11・13）） |
| * | 白鳳時代の鑄造炉発掘 草津・笠寺廃寺 実態の解明へ意義 小笠原好彦教授談（京都（10・23）） | こだまつりに三五〇〇人 働く障害者 頑張れ 附属養護学校グラウンドで（毎日（11・13）他） |
| * | ブラックバス解剖 科学の面白さ学ぶ「DHAってどんなもの？」 教育学部（朝日（10・23）） | 滋賀大の学長講師に研究会 17日、彦根キャンパス（読売（11・15）） |
| * | 学生音コン大阪本選 フルーツ部門中学校1位 中川彩さん（附属中2年）（毎日（10・29）） | ゲストに英国人ら迎え 小中生の交流授業公開 教育学部附属四校園の教育研究発表大会（中日（11・16）） |
| * | スロービジネスフォーラム開催 滋賀・米原で来月6日（日経（10・30）） | 「運命」など3曲 24日に定期演奏会 滋賀大オーケストラ（京都（11・19））他 |
| * | 故郷で滋賀大留学生 コンサルタント会社 中国・福建省 OBらの支援受け（京都（10・31）） | 鎌倉のまちづくりフォーラムで探る 26日から滋賀大で（京都（11・20）） |
| 十一月 | 大学祭は「環境」重視 意識向上へ工夫 教育学部・デボジット制 経済学部・コミ回収大型コンテナ（朝日（11・3）） | 知事が難色示す 4大学の府県越境再編 ・統合 文科省に申し入れへ（毎日（11・22））他 |
| * | マーケティング戦略を披露 「マーケティング戦略フォーラム」開催（毎日（11・7））他 | 統合、まず交流から 京滋4大学、学生が交歓 滋賀大で二一人参加（京都11・26））他 |
| * | 稀覯本も手に取って 福沢諭吉編の「西洋事情」など 教育学部図書館で展示会 | W杯の余波など分析 教育学部 平井肇助教授（中日（11・26）） |
| * | 産学共同で近江商人研究 宇佐美英機教授（毎日（11・28）） | 県内2大学統合を 県学長に要望書（中日（11・27）） |
| * | 地域特性を生かして 4大学越境統合問題で県が文科科学省に要望（中日（11・29）） | 産学共同で近江商人研究 宇佐美英機教授（毎日（11・28）） |



編集発行：滋賀大学広報委員会

委員長 住岡 英毅（副学長）
小栗 誠治（副学長）
遠藤 修一（教育学部）
白石恵理子（教育学部）
太田 肇（経済学部）
中野 桂（経済学部）
山崎 勝也（総務課）
中村 豊市（学生生活課）
（印は本号のチーフ）

〒522 - 8522

彦根市馬場一丁目 1 - 1

（Tel：0749 27 1172）

発行日：平成15年2月

E-mail：koho@biwako.shiga-u.ac.jp

ホームページ：http://www.shiga-u.ac.jp/